大道具係

W校中等部一年一組

保山　健人

「ウィーン。ギー。サッサッサッ。ガンガン、ガンガン。」

普通ならうるさいと感じるぐらいの大きな音が、仕事場に鳴り響いています。今、僕はアメリカの学校の劇場で大道具係をやっています。今日は、ぼくがどうして劇のために舞台裏で働くようになったのかをお話したいと思います。

去年の事でした。ある日、放課後に外を歩いていたら、後ろから声をかけられました。振り向いたら、そこには近所の友達、ハドソンがいました。彼とは以前はそれほど仲良くはなかったのですが、四年生になってクラスが同じになった時、僕たちは二人ともクラスを笑わせることが好きで、気が合い、仲良くなりました。しかし、彼とは勉強面ではあれ以来、友達になりました。ブレーデンは、僕が大道具係に誘ってみました。すると来ると言い、来たら思っていたよりも楽しかったのか、毎日来ています。他にも僕はイーアンという陸上部のすごく足が速い子も誘ったのですが、彼は来ていません。そして、来週来る、再来週来ると言っている僕を誘ったハドソンも来ていません。

ぼくが毎日行くのはブレーデンと話せること、行くと決めたこと、そして大道具係の仕事がたのしいこと、その三つが大きな理由です。大道具係で働いているほとんどが高校生です。しかし、みんなやさしいのでほぼ全員で仲良くなりました。高校生たちと話しながら、みんなで力を合わせて薄っぺらい家やテーブル、いす、ベッドなども作ります。先週は、僕とブレーデンでちょっと長く居残ることにして、劇の中で人がぶら下がるための物を作りました。木材を測って切って、ドライバーを使ってネジで組み立てて行きました。ドライバーを使ってもうまくネジが入らない時は、大道具係の監督、ライアンに手伝ってもらいながら、すごく大きな物を作りました。高校生がぶら下がるので、結構頑丈に作って、とうとう仕上がりました。

僕は前に一度、実際の劇に出たのですが、あまり楽しくありませんでした。しかし、ほかの人が劇をしている時に、場面と場面の交代に出て来るものを動かす人達の仕事が面白そうだと思っていたこともあり、友達から誘われたことも手伝って今年大道具係をやることになったのです。そしてそれは正解だったと思います。僕は十一月に予定されている劇の上演が楽しみです。

「ウィーン。ギー。サッサッサッ。ガンガン、ガンガン。」

前には少しうるさいと感じていた音にも今はもうすっかり慣れて、自分の仕事場に流れ意味ライバルです。だから、振り向いた時、ハドソンを見て、

「何だろう。」

と、思いました。するとハドソンは、

「劇の大道具係なんだけど、一緒にやらない。」

と、言いました。

「いや、僕は遠慮しておくよ。」

と、言ったものの、ハドソンは僕の言葉など聞かなかったように説明を始めました。話を聞いてみたら面白そうなので、僕は来年入るとハドソンに約束しました。だから、今年やることになったのです。

ぼくは毎日陸上部に出てから1時間遅れて劇場に行っています。その時間に行くと、もう友達のブレーデンがいます。ブレーデンは去年引っ越してきた子です。はじめは誰も彼に話しかけなかったのですが、僕が友達と一緒に声をかけたら、意外と気が合ったのでそ

引越し

W校中等部一年一組
川上咲貴

私はカリフォルニアで生まれて、十年間もそこ住んでいた。アーリントンという小学校に通ってた。小さな学校だが思い出がいっぱいある場所、悪い思い出も最高の思い出がいっぱいつまっているとてもきれいな学校だった。そこで友達、親友、とクラスメイトがいてそれが当たり前の生活を五年間ずっと過ごしてきた。だがその普通の生活が一瞬で消えた。

「えっ―、転勤？」

姉が叫んだ。私は家族の会議を聞いてなかったので何が何だかさっぱりだった。

「嘘、だよね？やだよ…。」

るＢＧＭのような楽しい音に聞こえます。では、僕は仕事に戻ります。

二番目の姉も変な声で言い出した。私は全く聞いてなかったけれど私と二番目の姉は普段は会議していても聞いていないことが多いので二番目の姉の恵理の反応でこれは相当よくないことだとすぐわかった。

「すまない急に言って、だが決まったことだ。お父さんの仕事のせいだな、ごめんな。」

「えっ何？」

私は大声で言った。それを言った瞬間私はすぐ後悔した。父は寂しい顔をし、母は下を見た。それはいつもなら父と母がけんかした後の顔だったが今はそうではなかった。一番上の姉の美華は私の目をジロっと見て恵理は泣いてた。これも二人がけんかした後の顔だったがけんかなんかしてなかった。父は私のけげんな顔を見て私の質問に答えてきた。

「転勤するんだよ、咲貴。さようならなんだ。」

父は私の目をずっと見ていった。その目はとても悲しい目だった。私がテストで２５点取った時の悲しい目とは違った。

「転勤するって…パパどっかまたちがう所に行くの？」

私がそう言ったら父は少し笑顔を作ってちょっと私に笑いかけた。

「ちがうよ、咲貴。みんなと一緒に引越しするのさ。ニューヨークに住むことになった。」

「えっ！」

ニューヨークならうれしいと思ったのもつかの間、私は叫びだした。

「引っ越す！ニューヨークに？嘘。なんで？」

そう言った途端、すぐわかった。この会議もなぜあるのかその時わかった。

そして引越しする日は…。

父が説明したけれど何も聞こえなかった。何も聞きたくなった。信じたくなかった。これはもう、笑えない冗談だ。今すぐ親友と会いたくて仕方がなかった。私の一番の親友に会って泣いて話をしたかった。その時私は気付いた、世界は自分が思った通りにいかないことを。そんな当然なことを知らなかった私はその瞬間生まれて初めてその事実を知った。

会議が終わった後、親友から電話がきた。

「もしもし…

「どうしたの？元気なさそうだね…」

その時私はまた新しいことに気付いた。思った通りにいかなくても大切な人たちがいつもそばにいること。そして自分のことを支えてくれることを。元気がなくなった私はすぐ復活した。

「ううん！何でもないよ！」

私にみんながいる。家族、友達、親友にクラスメイトもいる。だから私はもう大丈夫。みんなが私を支えてくれるから。

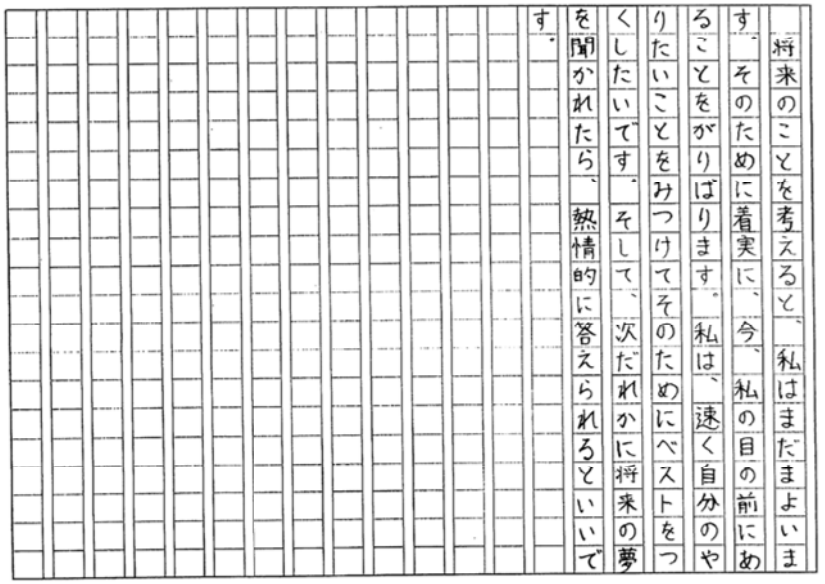
将来のなやみ

□校　古庄　アカネ

将来のことを考えると、いろいろな課題が浮かび上がってきます。仕事、大学や親の望み、将来自分になにがおこるかも分かりません。でも、私はいつも大きな夢を抱きます。とにかく「お金もちになり、幸せになりたい。」と思います。たぶん他の人も似た考えを持っているかもしれません。しかし、これは現実的ではありません。お金と幸せになる前に努力が必要です。でも、私はまだなにに努力をつくせばいいのかさえ分かりません。

将来のことを聞かれると、私は一番最初に高校と大学のことが頭に浮かびます。私にはまだ大学は遠いけれど、高校入学はあと一年です。高校生活は待ち遠しいけれど、どのコースに集中するかは、きりさせておかないと大変です。大学はあと四年か五年です。良く考えてみるとそんなに遠くはありません。その間に、何億かの職業から一つを選ばないといけません。今、私が一番苦労しているのは何億から一つを選ぶことです。私のほとんどの友達は医者になろうと決心しているけれど、それは親に言われているからか、お金のためです。でも、私は楽しめてお金をもらえる仕事が一番だと思います。私は、いまのところビジネスやファイナンスに興味をもっています。ビジネスやファイナンスに関係する仕事は数えきれないほどあります。でも、自分自身に一番ふさわしい仕事を見つける前に高校や大学で学ばなければなりません。

どの職業に進むか分からないとき、私はいつも習慣のように親に訪ねます。「私はなにになりたいの？」いつも、もらう答えは、「ビジネスかファイナンスにいけばお金がいっぱいもらえるよ」。学校の自己紹介で将来の夢をいわないといけないときには、「会計士」やほかのビジネスやファイナンス関係のことをいいます。そして、親の望みがだんだん私の興味になっていきました。



将来のことを考えると、私はまだまよいます。そのために着実に、今、私の目の前にあることをがりばります。私は、速く自分のやりたいことをみつけてそのためにベストをつくしたいです。そして、次だれかに将来の夢を聞かれたら、熱情的に答えられるといいです。

20×20

1

「咲友理ちゃんご

Ｌ１校　中二・一組　中村夢乃

私は、今年の夏日本に行きました。行く予定が決まってからは、日本行きが楽しみで仕方がありませんでした。それはどうしてかというと、いとこのお兄ちゃん（綾真）に四月に娘が生まれ、その子に初めて会えるからです。予定日より一ヶ月ほど早く生まれてきた咲友里（さゆり）ちゃんの様子は、綾真がウエブサイトにアップしてくれるフォトギャラリーで見ていました。本物の咲友里ちゃんに会える！　そう思うだけで、毎日わくわくしていたのです。

咲友里ちゃんに初めて会った時、私はとても緊張していました。赤ちゃんを抱っこしたことが今までにほとんどなかったからです。もし落としてしまったらどうしよう、と心配でした。まわりの人から見ても、緊張してひきつった顔をしていたのではないかと思いま

2

す。でも、心の中ではうれしかったです。だって、やっと本物の咲友里ちゃんに会えたんだもの。

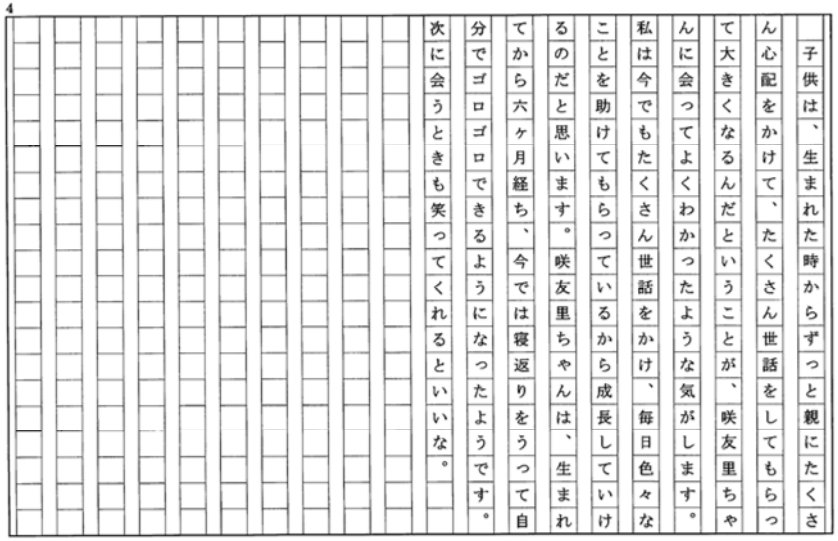
咲友里ちゃんは、私と初めて会った時、何回も何回も泣きました。その後も家族みんなと一緒に食事をしたり、何度も会う機会がありましたが、いつも私が抱っこをすると、泣いてしまいます。まだ赤ちゃんだから仕方がないのですが、どうして私とやっと会えたのに喜んでくれないんだろう、と少し悲しくなりました。日本からニューヨークに戻る日の朝、最後にもう一度、咲友里ちゃんに会いに行きました。すると、その日は、私の顔を見て、なんと喜んでくれたのです。抱っこをしても、ニコニコ笑ってくれました。バイバイするまで、ずっとご機嫌でした。

咲友里ちゃんは、みんなで集まっている時に大声で泣いて、いつまでも泣き止まなかったことがありました。そんな時、食事中であろうが、お父さ

3

んとお母さんは、自分のしていることを中断して、咲友里ちゃんを抱っこしたりあやしたりしていました。レストランで食事をしていた時も、食べるのをやめてずっと抱っこをしていた事もありました。咲友里ちゃんのお母さんは、夜もおっぱいをあげるために起きているので、長い時間続けて眠ることがなかなかできない、と言っていました。私は、私が赤ちゃんだった時もこんな風にすごい声で泣いていたのかな、私のお母さんもいつも大変だったのかな、と思いました。

いとこの家は、私のおばさん（つまり咲友里ちゃんのおばあちゃん）の家から歩いてすぐの所にあります。私はニューヨークに住んでいるので、おじいちゃん・おばあちゃんがそばにいたことがありません。多くても一年に一度、しかも数日間しか会えません。いつも近くにおじいちゃん・おばあちゃんがいる咲友里ちゃんは幸せだな、とうらやましく思いました。



子供は、生まれた時からずっと親にたくさん心配をかけて、たくさん世話をしてもらって大きくなるんだということが、咲友里ちゃんに会ってよくわかったような気がします。私は今でもたくさん世話をかけ、毎日色々なことを助けてもらっているから成長していけるのだと思います。咲友里ちゃんは、生まれてから六ヶ月経ち、今では寝返りをうって自分でゴロゴロできるようになったようです。次に会うときも笑ってくれるといいな。

三つの国にまたがる友情

W校二年　長瀬茉結

彼女がアメリカに来ると聞いたとき、心がカーッと熱くなるような、今まで経験したことのない感情が湧いてきた。それは十年ぶりと言ってもいいほどの二人の再開の始まりだった。彼女と私はお互いが0歳の時から知っている。いや、生まれた時からといっても過言ではない。

2000年、私たちは生まれて間もなく同じマンションに引っ越してきた。偶然にも父親同士が同じ会社で、二家族とも母親が同じ年齢で娘二人がいるということもあってすぐに家族ぐるみの付き合いとなった。毎日のように一緒に公園に行き、夕食を食べ、週末には二家族でバーベキューなどもしていた。

私より八日早く生まれてきた彼女とは、よく喧嘩もしたが、いつも隣にいてくれた。しかし、三歳の時、父親の転勤で彼女はロシアに引っ越してしまった。突然親友を失った私は三歳なのにもかかわらず、ショックを受けていたと母は語る。一年に一度あるかないかぐらいの一時帰国では、ままごとをしたり、一緒にお風呂に入ったりしてわずかな時間を思いっきり楽しんだ。別れを惜しみ、またすぐ会えるからと親に慰められながら、彼女はまたロシアに帰って行った。それでも、それから四年間、会う機会が急激に減り、二人の中でお互いの存在はだんだんと薄くなっていった。ロシアから帰ってきた彼女は他の町に住むことになり、お互い小学校で他の友達をたくさん作った。彼女の帰国後も何度か会っていたが、持つ友達も趣味も全く違う二人の会話はぎこちなかったのを今でも覚えている。

そして私が小学校四年生の時、父の転勤でアメリカに引っ越すことになった。そのことを聞いたとき、私は友達のことを想って泣いた。しかし、その友達の中に彼女が含まれていたかはあまり記憶にない。

渡米の日、たくさんの友達に囲まれて私は空港行きの車に乗り込んだ。空港のホテルでは友情の証である手紙をベッドの上に並べ、一人一人の別れの言葉を目に涙を浮かべながら読んだ。そんな時、ノックの音が部屋に響いた。意味深な笑みを浮かべながら母がドアを開けると、最後に見たときよりもはるかに背が高くなっていた彼女が立っていた。最初は何が何だか分からず、色々な疑問が頭の中に浮かんだ。何も聞かされていなかったのは私だけだった。母の満足そうな顔を今でも覚えている。その日、彼女と撮った写真を今見ると、おかしくて笑ってしまう。少し距離をおいて座り、恥ずかしそうに、でも、すごく嬉しそうに笑っているからだ。彼女は私が渡米する前に最後に会った友達だ。

渡米してからは忙しい毎日に追われ、新しいことを頭に詰め込まれた。もういやだと泣いた日も数えきれないほどある。毎日、「早く日本に帰りたい。」と頭の中で呪文のように唱え、何の楽しさも見つけられず月日が過ぎ

て行った。

渡米してから三年目の秋、母が全く予想していなかったことを口にした。母の言葉を一つ一つ頭の中で整理していくと、こういうことだった。お父さんの転勤で来年の夏、彼女がアメリカに来ることになったのだ。あんなに小さい時から知っていたのに転勤や引っ越しで私たちは一度も同じ学校に通ったことがなかった。また昔のように、すごく近くに住んで、毎日のように遊びたい、と色々な希望が頭の中を巡った。それから彼女が引っ越して来るまで、そう長くはなかった。彼女の家族は私の家から車で約二十分離れたところにある家に決め、学校だけは同じじゃなかったが前よりはずいぶん距離が近くなった。

彼女が引っ越してきてから数日後、私たちは二週間の泊まりのキャンプに参加した。二週間、同じ部屋で過ごすことは楽しみで仕方がなかった。今から考えると私たちの親は今まで空いていた二人の隙間を埋めようとこのキャンプに申し込んでくれたのかもしれない。だとすれば、その計画は大成功だ。二週間で私たちは今までの時間を取り戻すかのように絆を深めた。最初はお互い気を遣ったり、話が弾まなかったりしたこともあったが、帰りのバスの中では小さいころの思い出話が次々と出てきた。

キャンプから戻ってきた私たちはそれぞれ学校生活が始まった。私は彼女に英語を教え、彼女は得意な数学を私に教えてくれる。週末には二人とも大好きな野球をしたり、昔の二人が喧嘩をしているビデオを見て、大笑いしたりしている。アメリカでこんな近くでこんなに強い友情を結ぶことができる友達は彼女しかいない。彼女がアメリカ生活を楽しいものにしてくれていることは確かだ。たくさんのすれ違いを経たからこそ私たちは昔よりも強い絆で結ばれているという気がする。一生の友達となった彼女と、おばあちゃんになっても一緒に笑っていたい。

視点の違い

ニューヨーク補習授業高　W校中等部二年
奥田　りりか

夏休みのある日、私は父と母とともにマンハッタンにミュージカルを見に行きました。そのミュージカルの題名は「ウィキッド」。この物語は「オズの魔法使い」という物語に出てくる悪い魔女、エルファバの視点で彼女の人生を描いたものです。ですから、シーンの中には「オズの魔法使い」と重複する場面もあり、登場人物も「オズの魔法使い」でおなじみの主人公ドロシーや、彼女の愛犬トト、脳のないかかし、ブリキのきこり、臆病なライオンも出てきます。そして、それらの物語の登場人物に対する、全く別な見方による物語が与えた正反対な印象は、私が「物事は色々な視点から見て考え、判断しなければその真実はわからない」と考えるようになったきっかけとなりました。

私は、「オズの魔法使い」の物語の中で主人公、ドロシーとその仲間が長い旅の途中、悪い魔女、エルファバを倒すシーンではドキドキ、ワクワクして、エルファバに対して「ざまぁみろ」などと思い、ドロシーに対しては「優しくてかっこいい」などと思っていました。ですが、「ウィキッド」を見た後、それらの物語に登場する彼らへの印象ががらりと変わりました。なぜなら、物事は見方の違いにより善にも悪にも取れるということを、一つの出来事を二つの視点から描くこれらの物語に教わったからです。「オズの魔法使い」の中では、悪い魔女を倒しオズの国を救ったドロシーと彼女の仲間が善で、エルファバは悪として書かれていて、私もそうだと思っていました。ですが、「ウィキッド」の中ではドロシーを助けるオズが悪で、エルファバは強大な魔法の力を持っていて、オズに手を貸さなかったがゆえに罠にはめられたのです。そして、彼女は肌が緑色だったせいで幼いこ

ろから孤独だったこと以外は普通の人とは変わらない、友達思いの優しい女の人でした。

「オズの魔法使い」の中で、ドロシーはオズにエルファバは悪い魔女だと説明され、退治したら家に帰る手助けをしてあげようと提案されてオズの提案を受け入れ、エルファバを倒しに行きました。このとき、オズはエルファバは悪い魔女だと真実ではない情報をドロシーに伝えました。このことにより、私たち読者はドロシーと同じようにエルファバは悪い魔女だと思いこみました。ですが、このオズの言葉は嘘です。真実はもっと違い、エルファバはオズによって悪にされたのです。もし、このときドロシーがほかの人にも話を聞いて、違う視点から物事を見る描写を入れたら、私たち読者も真実に気づけたかもしれません。それか、私たち読者が物事を違う視点から見るということをしていたなら、なぜエルファバが人々を恐怖に陥れたのかに疑問を持ち、考えてみることができたのかもしれません。ですが、人がたくさんある中の一つの視点からしか物事を見なかったことにより、エルファバは悪とされ西の国の悪い魔女という道しか歩めませんでした。

このように、人間はいちばん最初に手に入れた情報に考えを左右され、先入観を持って物事を考えてしまいます。特に、このような物語ではなく、現実ではそのような物事に自身がかかわっていることで、なおさら物事に関係のあることに対する先入観が働き、違う視点から物事を見て、考えるということが難しくなります。もしかしたら、違う視点から物事を見ることができず、先入観や自分の判断だけで動いてしまい、大切なものを失ったり、失わせたりした人もいたかもしれません。

これは特に、警察や裁判官、先生、それら判断を下す立場にいる人によく起こることです。時には、誰か一人の先入観を持った物事の見方により、間違った真実が真実となり、誰かの人生が狂ってしまうかもしれません。

ですから、もし判断を下さなければならない状況に陥ったとき、先入観にとらわれたり、自分の視点が正しいと勘違いし、違う視点から物事を見ることを怠ったりせず、真実を見極めようと常に考え、行動決めなければならないと私は思います。

1

転校

ニューヨーク補習授業校　三年一組

岩佐　佳奈

アメリカへの転校を知ったのはエープリルフールの日だった。もちろん私は「下手な嘘だなー」と笑った。でも父は「本当だよ」と笑いながら言った。そのとたん、私は大号泣した。部活で部長になるために頑張ってきた今までの努力、大切な友達、そして今までの生活。その全てを突然失うという悲しみで心がいっぱいだった。私が在学した日本の中学校は、学年全体みんな仲が良かった。だから失う友達も多かった。そして部活のバレー部では、本気で部長になりたかったので、あと一歩というところで絶対になれないと決まったのがとても悔しかった。

アメリカに来て約一ヵ月頃、私はまだ現実を受け止めきれないでいた。しかし学校が始まると同時に、段々と自分の置かれている状況が理解できるようになった。最初の方は

「アメリカにいるんだ」くらいだった。しかし五ヵ月くらい過ぎると日本が恋しくてたまらなくなった。今すぐ帰りたいと思った。なぜなら、英語が理解できない、アメリカ人の友達もできない、授業も何言っているのか分からない、アメリカ人に日本人だからと馬鹿にした対応をされる、など、不満・不安・ストレスが溜まっていたからだ。そしてなによりも、私が通っていたアメリカの学校には、日本人が沢山いるせいで、日本人が固まり、それをアメリカ人が見て嫌い、近寄ってこない、というのがとても嫌だった。

そんなある日、私は突然焦り出した。日本を出発する前、友達に「英語できるようになって帰ってきて」と言われた。しかし私はもうすぐ半年が経つというのに変化が見られないでいた。遅くなったけれど、今までの分を取り戻すためにとにかく努力した。先生の話をよく聴き、分からない単語があったら電子辞書ですぐに調べて、先生の言ったことを理解できるようにした。そして長文が出されるたびに全訳した。すると、段々と英語が理解できるようになってきた。その変化がとても嬉しかった。

アメリカでは、バレーの季節は秋だ。だから来てすぐにトライアウトを受けた。バレーには自信があったのでもちろん受かった。アメリカ人は強いだろうな、と思っていた。しかし私が通っていたミドルスクールの子たちは私が所属していた日本のバレー部と比べると技術面で劣っていた。アメリカ人には興味を持たないので、私は誰よりも上手にプレイをした。するとみんなが私の名前を覚えてくれた。スポーツは、どんなに言葉が通じなくても、人と人とが繋がることが出来るものだということを実感した。

ミドルスクールの後半はハイスクールに向けて英語力をとにかく上達させた。卒業した時には、先生たちに「上達したね」と褒めてもらえるほどになった。

夏休みが終わり、私のアメリカ一年目が過ぎた。そしてハイスクールも始まり、二回目のバレーのトライアウトも始まった。夏休みの間にぐんと英語力が落ちたのではないかと心配になったし、トライアウトに受かるかも心配だった。昨年はアメリカでの初スタート。再び新しいスタートに不安を感じていた。しかし英語力は落ちていなかったし、授業もついていけたし、トライアウトにも受かることができた。いいスタートが切れたと思う。

アメリカに来てから今まで、色々な考えの変化があった。まず一つに、アメリカ人への見方が変わった。最初の方は「自分勝手で他人に興味がなく意地悪」という印象だった。今もその考えは一部の人達には当てはまると思っている。しかし、アメリカ人のいいところも見つけた。例えば、人がくしゃみをしたら“Bless you”と言うところ、試合などで審判が判定ミスをしたと思ったら必ず反論しに行

くところ、感情が素直に行動に表れるところ、雰囲気を盛り上げるのが上手いところ、などだ。日本人がしないようなことをアメリカの人達は普通にする、それが面白い。そして二つ目の変化は、前ほど日本を恋しくなくなったことだ。もちろん帰りたいと今でも時々思う。しかしそのたびに「変化した自分をみんなに見てもらいたいから、もっと頑張ろう」と思えるようになった。友達の存在が私の背中を押してくれた。

日本で培った事は、こっちで私を支えてくれる。バレーの技術や努力すること、友達などだ。それと同じように、アメリカで学ぶことも日本に帰る私を支えてくれるのだと思う。アメリカと日本が今の私、そして将来の私を支えてくれる。私はアメリカで生まれ、日本で育った。だから、日本とアメリカはどちらも両親のようなものだ。その両親が教えてくれたことを大切に、これからの人生に役に立てていきたいと思う。

1

漫画博物館

ニューヨーク補習授業校　三年一組

阿部　紘子

夏休みの間、日本に帰国し、久しぶりに会う友達と遊びに行ったのは京都国際マンガミュージアムだった。私は今まで、海外に住んでいても日本の漫画という名の文化には詳しいと思っていた。しかし、この博物館は私に漫画の全く新しい面を見せてくれた。

名前に「国際」と入っているだけあり、この博物館には様々な言語に訳された漫画がいくつもの棚を陣取っていた。普段日本語と英語の漫画しか日常生活では見ない私には衝撃的だった。最新のものから不朽の名作まで、幅広い種類が、中国語からスペイン語まで、莫大な人々の言語に訳されていた。私は漫画という文化の大き過ぎるスケールをその時、はじめて目の当たりにしたのだ。これ程までに、漫画は世界に愛され、読まれていたのかと感動した。そして、反対に、漫画から他の

2

言語を学ぶ事も出来そうだと思った。漫画など、物語が違う言語でも、絵を元に話の流れを追うことが出来る。だからこそ、漫画は外国語に興味を持ち、勉強するいい道具になり得るかもしれない。漫画で日本の文化を他国に伝え、広げるだけでなく、漫画を使いほかの国の文化や言語を学ぶ事ができるのではないかと感じた。

もう一つ、マンガミュージアムで私が驚いたのは漫画の歴史である。この博物館には、年代ごとに漫画が分けられているコーナーがあり、私はそこで日本の漫画の始まりといえるような作品達に出会った。今の漫画とは明らかに別物なのに、そこに関係性や共通点を見出せる。読んでいて不思議な気持ちになるようなものだった。例えば、「のらくろ」という、一九三〇年代に描かれた作品は、古文みたいな「へ」と書いて「え」と発音するような昔の日本語で書かれているにも関わらず、今の四コマ漫画を思い出させるようなコマ割

3

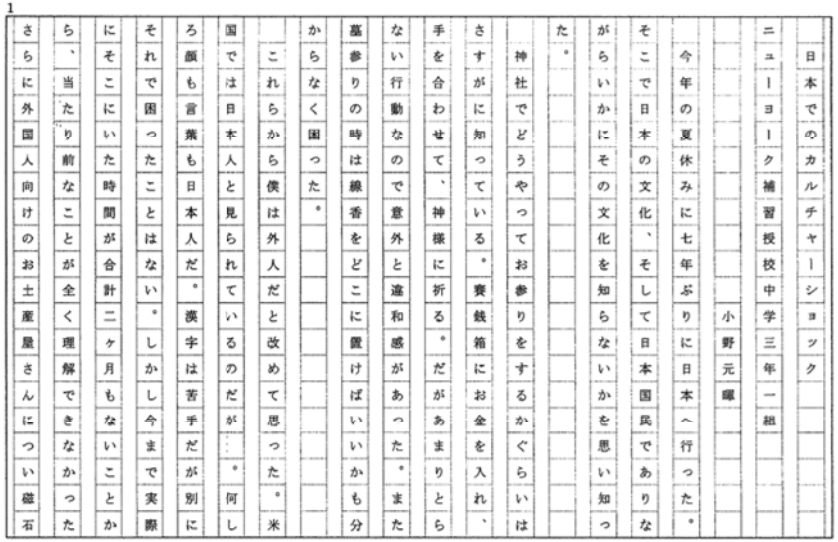
りと吹き出しが見られた。日本全体の歴史に比べると漫画の歴史はとても浅いかもしれないが、私は短くも濃く、進化し続けた歴史があることを学んだ。

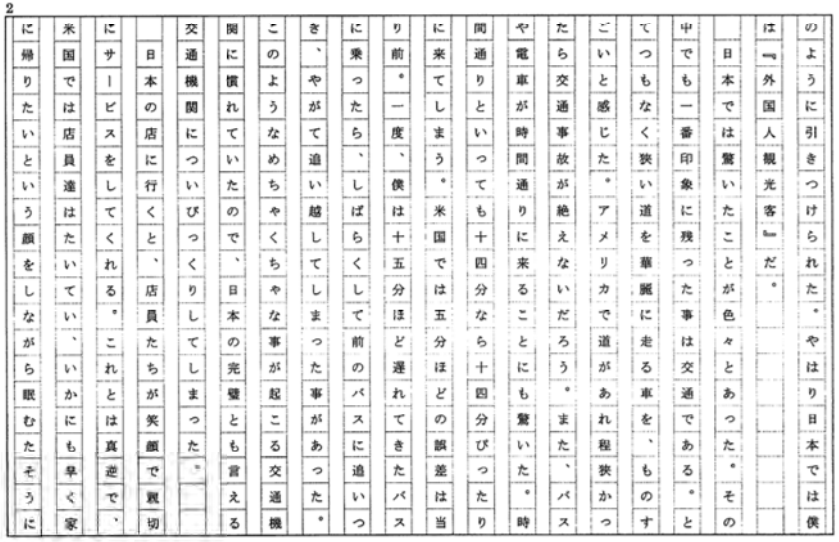
私は今まで、日本とアメリカ、両方の国の博物館や美術館に行ったことがある。だが、展示されているものに興味を持てないことが多く、大体両親に引きずられて行った思い出しかない。芸術や歴史ある物は子供にとってつまらなく、価値を理解するのが難しい。博物館や美術館は何も触れられない、遊べない、つまらない場所だと思っていた私の考えをこの博物館は変えてくれた。漫画は私にとって親しみ易く、価値は内容が物語ってくれる。このマンガミュージアムでは漫画を手に取って読めるからこそ、その価値を目で、心で、感じることができた。

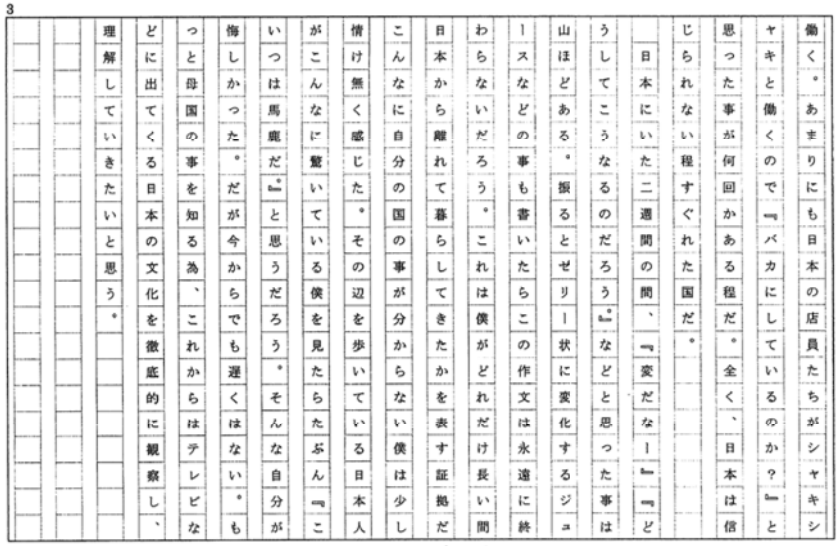
実はこの博物館はたった八年前にできたばかりだ。しかし既に、三十万冊以上の漫画が所蔵されている。人一人の人生で、この量の

4

漫画を読むのは不可能だ。だからこそ、一カ所に何十万冊もの漫画を所蔵しているマンガミュージアムは必要なのだ。漫画の人気は、年々上がってきている。それに伴い、漫画の数も増えている。そうなると、人一人が一生に触れる漫画の数は、全体の漫画の量に比べるとちっぽけなものになる。人一人が、漫画のすべてを知ることは到底出来ない。この膨大な量の漫画を一カ所に、マンガミュージアムに集めることで、古いものから新しいものまで、色々なジャンルの漫画に触れ合う機会が訪れる人に与えられる。私は、訪れた人の中の一人で、与えられた機会を充分に堪能した。そして、漫画という文化を更に深く知ることができた。こうして、マンガミュージアムは、私にとって掛け替えのない大切な思いでの場所となった。


1
日本でのカルチャーショック
ニューヨーク補習授校中学三年一組
小野元暉
今年の夏休みに七年ぶりに日本へ行った。そこで日本の文化、そして日本国民でありながらいかにその文化を知らないかを思い知った。
神社でどうやってお参りをするかぐらいはさすがに知っている。賽銭箱にお金を入れ、手を合わせて、神様に祈る。だがあまりとらない行動なので意外と違和感があった。また墓参りの時は線香をどこに置けばいいかも分からなく困った。
これらから僕は外人だと改めて思った。米国では日本人と見られているのだが…。何しろ顔も言葉も日本人だ。漢字は苦手だが別にそれで困ったことはない。しかし今まで実際にそこにいた時間が合計二ヶ月もないことから、当たり前なことが全く理解できなかった。
さらに外国人向けのお土産屋さんについ磁石


2
のように引きつけられた。やはり日本では僕は『外国人観光客』だ。
日本では驚いたことが色々とあった。その中でも一番印象に残った事は交通である。とてつもなく狭い道を華麗に走る車を、ものすごいと感じた。アメリカで道があれ程狭かったら交通事故が絶えないだろう。また、バスや電車が時間通りに来ることにも驚いた。時間通りといっても十四分なら十四分ぴったりに来てしまう。米国では五分ほどの誤差は当り前。一度、僕は十五分ほど遅れてきたバスに乗ったら、しばらくして前のバスに追いつき、やがて追い越してしまった事があった。
このようなめちゃくちゃな事が起こる交通機関に慣れていたので、日本の完璧とも言える交通機関についびっくりしてしまった。
日本の店に行くと、店員たちが笑顔で親切にサービスをしてくれる。これとは真逆で、米国では店員達はたいてい、いかにも早く家に帰りたいという顔をしながら眠むたそうに


3
働く。あまりにも日本の店員たちがシャキシャキと働くので『バカにしているのか？』と思った事が何回かある程だ。全く、日本は信じられない程すぐれた国だ。
日本にいた二週間の間、『変だなー』『どうしてこうなるのだろう』などと思った事は山ほどある。振るとゼリー状に変化するジュースなどの事も書いたらこの作文は永遠に終わらないだろう。これは僕がどれだけ長い間、日本から離れて暮らしてきたかを表す証拠だ。
こんなに自分の国の事が分からない僕は少し情け無く感じた。その辺を歩いている日本人がこんなに驚いている僕を見たらたぶん『こいつは馬鹿だ』と思うだろう。そんな自分が悔しかった。だが今からでも遅くはない。もっと母国の事を知る為、これからはテレビなどに出てくる日本の文化を徹底的に観察し、理解していきたいと思う。

私とスポーツ

ニューヨーク補習授業校W校高校一年
グレイ希望

八月十八日、秋のスポーツのプリシーズンが始まった。今年私は水泳にチャレンジしてみると決意した。私の学校は小さい為プールがない。水泳のチームは同じような事情を持つ三つの学校と組み、一つのチームを作っている。プリシーズンではプライベートスイミングクラブのプールを借り練習を始めた。今、私達は隣町の大学のプールを借りて練習を行いミートにも出ている。

しかし、私は水泳やスポーツができる人ではない。小さい頃から運動が苦手であった。運動好きになるように母は私が幼児部の頃から空手や水泳のクラスに通わせた。でもまもなく妹が生まれ母が忙しくなり、水泳も空手も辞めてしまった。だが水泳は好きで本当は

続けたかった。小学校の体育の時間にはいくら頑張ってもボールは渡ってこないし、退屈な時間を過ごした。いつの間にか私はスポーツができない人なのだと決め付けていた。

五年生の時、友達がアイススケートをやっていたので私と妹も習ってみることにした。ある程度上達したけれどコーチが代わったり、学校が忙しくなったりしたので二年間くらいで辞めた。心の底ではやったり辞めたりの繰り返しでスポーツが駄目な私が嫌だった。七年生になった時、私はなぜかバレーボールに興味を持ち、思い切ってトライアウトに行ってみた。しかし、全力を尽くして頑張ったにもかかわらず、サーブはうまくネットの向こう側に届かず、その年はチームに選ばれなかった。

次の年、私はまたトライアウトに挑戦してみた。なんと今度は私はバレーボール部に入れた。びっくりしたと同時に嬉しかった。皆とても上手で、私はなるべくいいプレイをするように努力した。このチームはコミュニケーションがうまくとれず、試合の時お互いをあまり応援しなかった。私はこのことを通してチームワークの重要性を初めて知ることができた。その後、スプリングトラックをやってみたがつくづく私にはスタミナがないと気づかされた。九年生になった私はバレーボールのトライアウトに行ったがチームに選ばれなかった。がっかりした私は、何のスポーツもしないでおこうと考え始めたが、またスプリングトラックをすることにした。一年ほどスポーツをやっていないとずいぶん調子が悪くなってしまうんだなと思い知ったのは最初の何週間かの間、いつもウォームアップでびりになった為であった。

十年生になった今、水泳をやると決めた。私達のチーム名はそれぞれの学校がある町の頭文字を組み合わせて作ったもので、コーチ三人とメンバー二十数名でできている。始めてみたら水泳は楽しいが、練習はとてもきついい。プリシーズンでは夏の太陽や木の緑に囲まれ、蝉が鳴いている中で背泳ぎをして青空をじっと眺めることができ、とても気持ちよかった。私や他の初心者にも先生方は容赦なく泳がせた。体のあちこちが痛くなったりするが、そのおかげで少し上達している気がする。練習は朝六時学校が始まる前か学校の後の四時頃のどちらかにあり、トラックで走るほど疲れる。ミートではものすごくきつい水着を着て、プールがとても冷たかったりすることもある。それでも水泳を通して自分やほかの人と戦い、リレーや応援ではチームワークも学べる。スポーツは自分の限界を超えて成長するものなのだと思うようになった。

最近のミートの中で「きわどいミートになるから皆全力を尽くして頑張りなさい。」とコーチ達に言われた日があった。ミートが始まり、零点何秒かの差でどちらのチームが一位か二位かがわからないレースが何度もあった。泳いでいる人の名前を呼んだり、「ゴーシェディー」とチームの名前を叫んで応援した。のどと鼓膜が壊れてしまうのではないかと心配するほど私達の声はプール中鳴り響いた。私も自分が泳ぐ番になれば力を出しきった。最後のレースはリレーで私達のチームも相手のチームもプールの両側に立ち、もう一度大きな声で応援した。点数を聞く時間となった。「七十七対九十三、シェディーの勝ち。」私達は飛び上がり、笑顔がさらに明るくなった。相手のチームと並び「グッドスイム」とお互いに呼びかけ、次々にハイファイブをしながらミートを終えた。

私はたまに九年生で水泳部をやってみるべきだったとか、小さい時水泳を続けたいともっと強く言えばよかったと後悔することがある。でも過去の事は変えることができないし、いつまで考えていても仕方ない。先の事にもっと集中して前に進むしかないのだと自分に言い聞かせる。レースではより速く泳げるようひたすら水を掻き切っていく。後ろなんか

振り向いている暇は無い。スポーツと向き合って挑戦して行くのはとても大変だけれど体をきたえ、目標を目指して頑張ったり、限界を超えたりして他の人と一緒に努力できることはとても大切なのだと思えるようになっている。今年は水泳でしっかり挑戦して行きたい。

「英語と日本語の狭間で」

W校　高等部二年
ハナガン　ありそん

私は、英語より日本語の方が得意です。日本人の母とアメリカ人の父の間に生まれた私ですが、昨年日本に留学するまで日本に住んだ経験はありません。ただ小学5年生までアメリカにある日本人小学校へ通っていたことと、母の主張で、家の中では日本語で会話していて、アメリカ人の父も流暢な日本語を話すので、アメリカに住んでいるにも関わらず、私は十歳ぐらいまで英語をほとんど学んでいませんでした。

現地校へ転校した際、私は「いじめ」を体験しました。今思うと、それは深刻なものではなかったのですが、当時の私には生まれて初めての経験ということもあってかなり傷ついてしまいました。それが発端でそれ以降は自分を出すことに恐れを抱いてしまったように思います。

自分はアメリカ人のくせに、アメリカ人の前で緊張することがよくありました。小さかった頃は特に、アメリカのキャンプや水泳のチームで、私はただ優しそうな子を見つけてはその子の後をついていくだけでした。当然、私の周りには英語がしゃべれる子ばかり。友達が自分に会話を振ってくれても聞き取れない、先生が話すことも頭に入ってこない、答えられない…そういうことの繰り返し。人と比べる必要はない、と分かっていても、クラスでスラスラと英語で発言する子がいると、内容に感心すると共に、焦る気持ちもありました。そのうちに私は自分に対し不安な気持ちを抱くようになってきました。『英語を上手く話せない私は、実は馬鹿なのではないか？』と。

しかし私が今こうやって日本語で文章を書けるのは、私が日本語を勉強してきたからであって、そのため英語が遅れてしまったのは仕方なかったのだと思います。もちろん他の道もあったでしょう。現に私の妹や弟達はキンダーから現地校に通っており、英語をとても速いスピードで学んでいっている様子です。しかし彼らは彼らで日本語の補習校についていくのに四苦八苦しています。結局、どのようなパターンでも善し悪しがあるのだと思います。

私も弟妹も今は大変かもしれません。しかし二つの言語を学べることはとても幸せなことです。周りの子達が英語をしゃべれる分、私は日本語をしゃべれるのです。日本語も、まだまだ上手ではありませんが、自分の英語力と日本語力を合わせてみると、自分は馬鹿じゃないと思えるのです。高校生にもなって、自分が話す言葉に自信が持てないのは、はっきりいって嫌です。でも文句を言っても仕方がないし、本当に努力あるのみだと思います。

日本へ留学した時、私はたくさんの人に日本語をほめてもらいました。「アメリカからの留学生でこれほど日本語が上手な子は初め

てだ。」といわれ、友達とも言葉の問題なく話すことができました。それでも、たまに自分が日本語でしゃべれるということを忘れ、自分の英語が下手なことしか考えられなくなるときがあります。

私には自分を他人と比べる癖があって、自分が出来ないと焦り、ほめられても、そんなこと出来て当たり前じゃないか、とネガティブに考えてしまう癖があるのです。こういう考え方だから自分が恵まれた環境にいるということを忘れたり、嫌なことに目が行ってしまうのだと思います。

英語と日本語、どちらも流暢になりたい気持ちは強くありますが、それ以外にも両方の言語を通したものの見方、人とのつきあい方と学ぶべきことはたくさんあります．どんな困難も私を強くしてくれると信じて問題に立ち向かっていきたいです。

編集後記

今年度の作文コンクールでは、審査委員長として、児童生徒の作文から、佳作、入選候補作品の全てを読ませていただきました。

文章を綴るという学習は、補習授業校の教育にとってとても大切な学習活動です。それぞれの教室で、家で、皆さんが一生懸命に作文に取り組み、書き上げた作品にはたくさんの思いが詰まっていると実感しました。

その中から選りすぐりの優秀作品等をお届けいたします。入選しなかった児童生徒のみなさんも、ぜひ、ホームページを開いて、お友達の思いに相づちを打ってください、

保護者の皆様、関係各位におかれましては、児童・生徒の綴る力・伝える喜びを感じて下されば幸いです。

結びとなりましたが、長年に渡りご協賛いただいております

〈Panasonic Corporation of North America〉様に、衷心よりお礼申し上げます。

校長　櫻井　郁男